目次

一　源氏、病気の乳母を見舞い、隣家の夕顔の花に目をとめる。……五
二　源氏、病床の乳母を心から慰め、乳母感激する。……八
三　源氏、夕顔の花に添えられた扇の歌を見て、隣家の女に興味を覚える。……一一
四　源氏、六条の女の邸を訪れ、その往還に夕顔の家を意識する。……一四
五　惟光、夕顔の家を調査し、報告する。……一五
六　伊予の介上京し、源氏空蟬を思う。……一八
七　秋、源氏六条の女の邸を訪れ、侍女の中将の君と歌の贈答をする。……二一
八　惟光、夕顔の家を内偵し、ついに源氏を通わす。……二四
九　源氏、身分を隠して夕顔の女のもとに通い、これを深く愛す。……二八
一〇　八月十五夜、源氏夕顔の家に泊り、固く将来を契る。……三三
一一　源氏、夕顔を近くの廃院へ連れ出す。……三九
一二　翌日、源氏夕顔と一日中うちとけて語り暮らす。……四二
一三　その夜、夕顔物の怪におそわれて急死する。……四六
一四　惟光、善後策を講じ、夕顔の遺骸を東山の小寺に葬る。……五五
一五　失意の源氏、帰邸して引き籠る。人々見舞う。……五九
一六　夜、惟光参上して報告。源氏夕顔の遺骸に会いに東山へ赴く。……六三
一七　源氏、夕顔の遺骸と対面。喪心の態で帰る。……六七
一八　源氏、重く病臥し、一ヶ月後ようやく本復する。……七一
一九　源氏、侍女の右近を呼び、夕顔の素姓を聞く。……七四
二〇　源氏、右近と亡き夕顔を偲び、追悼の歌をよむ。……七九
二一　源氏、空蟬や軒端の荻と歌を贈答する。……八二
二二　源氏、夕顔の四十九日の法要を行う。……八六
二三　その後の五条の家の様子。源氏、法事の夜夕顔の夢を見る。……八八
二四　十月上旬、伊予の介空蟬を伴って伊予に下る。源氏餞別を贈る。……八九

一　巻名は夕顔の歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」（一一ページ）による。源氏十七歳の夏から初冬十月までのこと。

二　六条御息所（亡くなった前東宮の妃）の許へ源氏がお忍び通いのころ。ただしこの巻では、この六条わたりの女性を六条御息所であるとはっきりしるしたところはない。

三　源氏の乳母。父か夫が太宰の大弐であったのであろう。惟光の母。

四　源氏の家司。大弐の乳母の子。源氏とは乳兄弟の間柄で、源氏がもっとも信頼している家来。

五　檜の薄い板を網代形に組んでつくった垣。庶民の家の外構などに用いる。

六　部は格子の裏に板を張ったもの。半部はその半分で下半は板などにし、上半分を部として外側へ釣り上げたり押し上げたりできるようにしたもの。

七　柱と柱との間を一間（いっけん・ひとま）という。現在の長さの単位の一間（一八〇センチ）ではない。

夕顔

二

六条わたりの御忍びありきのころ、内裏よりまかでたまふ中宿に、大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりにける、とぶらはむとて五条なる家たづねておはしたり。御車入るべき門は、鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、檜垣といふもの新しうして、上は半部四五間ばかり上げわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの

透影、あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。いかなる者の集へるならむと、様かはりて思さる。一御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむと、うちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、門は蔀のやうなる、押し上げたる、見入れのほどなく、ものはかなき住まひを、あはれに、二いづこかさしてと思ほしなせば、三玉の台も同じことなり。

四切懸だつものに、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり五笑みの眉ひらけたる。源氏六「遠方人にもの申す」と、ひとりごちたまふを、

一網代車で、車の袖の家紋を隠したりしているのであろう。

二「世の中はいずれかさして我ならむ行きとまるをぞ宿と定むる」（古今集・巻十八・雑下・読人しらず）

三「台」は見はらしがきく高い建物。高殿。「玉の台」は美しくりっぱな御殿。玉楼。参考「何せむに玉の台も八重葎這へらむ中に二人こそ寝め」（古今六帖・六・葎）

四切懸は、二本の柱の間に横板を下から少しずつ重ねあわせながら打ちつけて作った板塀。

五白い花がほほ笑むように咲き誇っているさま。「眉を開く」は憂いが去って悦びが顔に出ること。白い花を擬人化したもの。

六「うち渡すをちかた人に物申す我そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」（古今集・巻十九・雑体・旋頭歌）

一随身は貴人の外出時に弓矢を持ち剣を帯び護衛として随従した近衛府の舎人。上皇には十四人、摂政関白十人、大臣大将八人、納言六人、中将四人、少将二人、衛門・兵衛の督四人、同じく佐二人と定められていた。源氏は中将なので四人いるが、ここは忍び歩きなので一人だけつれている。

二前ページ六の旋頭歌の第五句をそのまま用いて答えている。

三前ページに「門は蔀のやうなる、押し上げたる」とあった。

四引き戸。敷居の上を左右に引き動かす戸。

五練っていない絹。ごわごわとしていて薄くて軽い。身体にまといつかないので夏季用の衣服に用いる。

六裏のつかない袴。

七女童（めのわらは）

八紙張りの蝙蝠扇である。

九香を深くたきしめてあるのを。

御随身ついゐて、一随身「かの二白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき桓根になむ咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのも、あやしくうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、源氏「くちをしの花の契や。一房折りてまゐれ」とのたまへば、この三押し上げたる門に入りて折る。

さすがにされたる四遣戸口に、黄なる五生絹の単六袴長く着なしたる七童のをかしげなる、出で来てうち招く。白き八扇のいたう九こがしたるを、童「これに置きて参らせよ。枝も情なげなめる花を」とて、取らせたれば、門あけて惟